科学研究費助成事業研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号: 13501 研究種目: 若手研究(B) 研究期間: 2012~2016

課題番号: 23720263

研究課題名(和文)ライフステージに伴う外国人妻のアイデンティティの変遷

研究課題名(英文) Changes in identities of foreign married women with life stages

研究代表者

伊藤 孝恵 (ITO, Takae)

山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号:10348104

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究では、日本人男性と結婚し、日本で暮らす外国人妻の、結婚や母国に対する認識について、ライフイベントとの関連を中心に調査を重ねてきた。調査協力者は、日本に中長期滞在する東アジア出身の女性2名で、それぞれ専業主婦と仕事をもつ母親である。調査の結果、いずれの調査協力者も、国や文化差を意識せずに生活していると答えた。ただし、周囲との人間関係に自分の「居場所」を見い出せない時や、出産による休職と退職に伴う自己喪失感がある時などには、否定的な感情を伴って、母国と日本との差異を強く意識していた。また、子育て環境の違いは、ライフイベントの有無や環境の変化に関わらず、感じていた。

研究成果の概要(英文): In this study, I researched their cognitions of marriages and their home country focusing on the relation with their life events. The investigation cooperators are 2 females from East Asia who stay mid and long term in Japan, one is a full-time housewife and the other is a mother with work.

As a result of the investigation, both investigation cooperators replied that they are living matching Japan without being conscious of a country and the cultural difference between their husbands and entourage. But, they were conscious of the difference between the mother country and Japan as well as negative feeling hard when when the good human relations can't be built in Japanese society and time with a missing self sense with layoff by childbearing and retirement. The difference in the child rearing environment was found in spite of a change in the environment.

研究分野: 国際結婚

キーワード: 国際結婚

1 . 研究開始当初の背景

日本人男性と結婚して日本に生活拠点をもち、中長期に亘って日本で日本との中には、アジアは、日本の生活をもり、日本には、一方ではは、一方ではなる者もには、一方でみられる。日本には、日本の生活に関れているに関する。外国人をもいる。外国人をもいる。がは、が応いるのがは、の場があるが、の場があるが、の場があるが、の場があるが、の場があるが、の場があるが、の場があるがに見えるがあるがであるがに見えるがあるがに見えるがあるがに見えるがあるがに見えるが、の場にというなのだろうか。

外国人妻に限らず、日本に定住するア ジア出身の外国人には、周囲から日本 語によるコミュニケーション力が求 められる。コミュニケーションには、 言語力に加え、適切な対人行動をとる スキルも必要である。外国人にとって 日本社会で自明のこととして暗黙の うちに人々の間で共有されている価 値観や習慣に則った行動を理解し、自 らも実践するのは、困難な場合がある。 また、日本語や日本的な価値観・習慣 といったものが、家庭の中でも求めら れ、我が子への母語や母文化継承を願 う母親にジレンマを強いていること も指摘されている。また、初めて経験 する日本の学校文化において、子ども の学校行事の準備や集まりへの戸惑 いも聞かれる。子どもの順応性に母親 が対応しきれず、「日本のことが分か らない外国人」として、母子間に微妙 な信頼関係の揺らぎを生むことにつ ながりかねない。

そのような疑問に立ち、本研究では、 外国人妻の心情を探るべく、数回に亘 って聞き取り調査を行った。

2.研究の目的

本研究の調査・分析対象者であ る2名の東アジア出身の外国人妻 に対しては、長期に亘る調査協力 への理解と承諾を得ており、平成 22年8月にパイロット調査を実施 済みである。本研究では、平成22 年10月時点でそれぞれ「就学児童 と未就学児童のいるライフステー ジ」(外国人妻A)と、「妊娠・就 業しているライフステージ」(外 国人妻B)にある2名に対し、3年間 の生活環境や対人関係、自己及び 出身国・文化に対する心的構造を 調査士、アイデンティティと環境 の適合性を明らかにすることを目 的とする。従来あまり注目されて こなかった個人と環境との適合性 に注目し、個人と環境の関係から 生じる心的構造を、各々のライフ ステージに応じ縦断的に追跡して いくことで、環境とアイデンティ ティとの関連を一貫性をもって見 ていくことが期待できる。

3.研究の方法

調査協力者は、日本に中長期滞在 する東アジア出身の女性2名で、 それぞれ専業主婦と仕事をもつ母 親である。調査方法は、子どもの 成長段階やライフイベント時に応 じて、聞き取り調査を行った。本 研究でいうところの「ライフイベ ント」とは、調査協力者が、既に 結婚、出産を経験していることか ら、その後の産休・育休や、子ど もの進級・進学といった成長段階 を指す。聞き取り調査では、研究 者が趙さ協力者宅まで出向き、 対一で行った。また、調査協力者 の許可を得て、インタビュー内容 は録音し、それを文字起こしした ものを分析対象とした。調査協力 者の個人情報管理には十分気をつ けるとともに、調査で知り得た情 報を研究以外の目的で公をしない

こと、及び、論文等で公表する際

は、個人名や居住地などが特定さ れないよう配慮することを調査の 前に、研究者と調査協力者の間で 確認した。

4.研究成果 調査協力者2名とも、家庭内外に おいて日本人と接する機会が多く、 日本人ばかりの環境にあって、自 分は日本社会に「馴染んでいる」 「溶け込んでいる」といった感を もっていた。周囲の日本人からも、 外国人ゆえの差別を受けることも 少なく、好意的に受け入れられて いると認識していた。 ただし、日本社会において、親し い人間関係を築けなかったり、活 躍する場をもてずにいるなど、所 謂自分の「居場所」が見い出せな い時や、育休による休職とその後 の退職に伴う自己喪失感がある時 には、否定的な感情とともに母国 の習慣や価値観との違いを強く意 識していた。また、子育ての違い を、母親同士の間で感じる時には 孤立感を募らせたり、義母・夫と の間に感じる時には、異文化で母 国のやり方を貫こうとする決意を 示す姿勢も見られた。 そして、一人の調査協力者につい ては、自動車の免許を取得し、行 動範囲が広がったことが人間関係 をも広げ、自分の活躍の場を見出 すことにつながった。母文化と日 本文化の区別や意識をもつことが ほとんどなくなり、差異を国や文 化ではなく個人に起因すると捉え るように変化した。地域在住者に とって、車は欠かせない移動手段 であり、外国人にとってもできる だけ早い段階で取得することが生 活範囲を広げて豊かなものにする ことが明らかになった。 また、仕事をもつ協力者について は、出産後しばらくは義母や夫の 意見に従い、子育てに専念した時 期においては、社会からの孤立感 と焦燥感を抱いたという。そして、 家庭と仕事の両立が当然の母国の 女性像を追い求め、義母や夫と対 立しても、仕事を続けることを選 択した。周囲からの実際的・精神 的な協力が得られない状況にあっ て、「国際結婚の犠牲」だと「覚悟」 し、仕事をしながら家事・育児を ほぼ一手に引き受けている。 この点は、決して外国人妻に特化 した問題ではなく、日本社会の抱

えるジェンダー問題としてとらえ

る必要があるだろうが、自分は日 本人女性とは違う」という強い意 識の下で、家庭と仕事の両立に奮 闘する外国人妻の姿が浮き彫りと なった。

いずれの調査協力者においても これからも日本で生きていくこと や日本人と付き合っていくことを 肯定的に受容しつつも、母国に対 する意識について、その時の環境 によって変化が見られるとともに、 二人の間でも違いが見られた。

また、2010年と2012年のAの 文化的アイデンティティについて、 PAC分析の結果及びフォローア ップインタビューの内容を整理し、 その変化と共通点を探った。

まず、全体的な変化として、2010 年と比べ 2012 年の方が否定的な 評価が少なくなったことが挙げら れる。2010年には9つの項目のう ち2つを除いてすべてマイナスと しており、プラスの2つについて も母国の文化を肯定するものであ って、翻せば日本の文化に対して 否定的と捉えられる解釈であった。 また、文化的アイデンティティに ついて両年とも二つのグループに 分類されているが、2010年につい ては「確かに、中国人なんだけど、 日本でずっと生活していくと、自 分が果たして本当はね、中国人で いいのかなぁ、悩んでいる時もあ りますね」とあり、日本人の先祖 代々のお墓に中国人の自分が入る ことに「疑問を持った時もあった」 国籍変更も念頭にあったこと を振り返り、このまま中国人とし て日本人の家庭、日本の社会に受 容されるかどうか不安を抱えてい たことが読み取れる。 それが 2012 年については、「今回

(2012年)なぜかすごくさっぱり つ、こういうふうに分けられて、 なんだろうと思ってるんですね」 「今の状況、今の自分が、だんだ んはっきりしてきたのかなぁと思 ってます」「よくなったのかなぁ、 自分が」と述べているように、日 本社会において中国人の自分につ いてAの気持ちが整理されつつあ 日本人のお墓に中国人の自分 のまま入ることも「気にしなくて もいい」どこの国とかもあんまり 関係ない」と、中国人としての自 分を肯定的に受け止められるよう に変化していた。街中で自然と耳 に入ってくる母国語の会話が分か る心地よさも、2010年には感じら

れなかった意識である。 この心境の変化に最も大きく起因 すると考えられるのが、交友関係 の広がりである。2010年には働き に出る自信がもてず、中国語を教 えることで社会とつながりをもち たいという思いを秘めていた状態 から、2012年には自動車免許取得 を契機に、卓球教室に通い始め、 それが縁で中国語を教え始めると いう大きな環境の変化が生じた。 さらに、子どもの学校のクラス役 員になり、その活動の中でこれま での家事・育児では得られなかっ た社会勉強ができた喜びを味わっ ている。こうした友人・知人との 関係や趣味等を生活の一部として 重視する意識は、子育て期の母親 の生活意識の特徴であるといえ (矢澤ら 2000)、周囲の日本人と の好意的なつながりが、日本社会 に生きるAを肯定する意識として 働いたと考えられる。 ここで興味深いのは、中国人とし ての自己肯定意識に大きく関与し たと思われる経験や人間関係のう ち、「役員の仕事」は文化的アイデ ンティティを意識する項目として 挙がっているものの、卓球教室や 中国語レッスンの時には中国人で ある自分を意識していないことで ある。共に卓球を楽しんだり、 国語の勉強を通じて中国文化や会 社事情などを共に話し合うといっ た、仲間や友人、同じ地域の住人 として、ある種同じステージ上に 立った友好関係においては、Aの 表層心理に文化的アイデンティテ ィは現れてこないのである。それ に対して「役員の仕事」の場合は、 ほかの母親の協調性やチームワー クを目の当たりにして自分のやり 方を自己修正した経験であり、学 びの経験は専らAの側にある。 まり、多数派、すなわち日本人か らの偏った、あるいは一方通行の 知識・情報の伝達や授受、会話の やり取りは、たとえAには受容で きる内容であったとしても、時に Aを委縮、孤立させる。人は自分 が住む意味世界と相容れない行為 に遭遇すると、不快な情動が生起 し、その解消に向けてなんらの行 動を起こすとされているが(箕 浦,1995)、Aの場合、子どもの扱 い方など納得のいかないことやト ラブルが起これば、まるで日本文 化の同化の波から自身を守るかの ように文化的防波堤を築いて、自 分は中国人だから」と文化的アイ

デンティティに依拠するようにみ える。この姿勢は 2010 年、2012 年の両年ともに見られ、Aにとっ て多様な習慣や価値観の受容が狭 隘な日本の地域社会にあって一種 の適応のためのストラテジーだと いえよう。今後Aの交友関係がよ り広がり周囲との間で対等な関係 が築けていく中で、Aがどのよう に両文化の相違を捉え、それに伴 い文化的アイデンティティがどの ように変容するのか、調査を重ね ていきたい。 フォローアップインタビューの中 で聞かれた母語の子どもへの継承 に関する語りにおいても、興味深 い変化が見られた。2010年には、 子どもたちに対して寝る前などに 中国語で話しかけるなど、子ども たちとの間で中国語でやり取りし たり中国語を教えたりしていた。 当時小学3年生の娘は、友だちに 自分が中国人だと特別視されるの を嫌って家庭の外では中国語を話 すのを拒んでおり、それに対して 「中国語しゃべれるって全然恥ず かしいことじゃないよ」と説得し たりするなど、母親の母語を子ど もに理解してもらおうという態度 自分が地域で中国語を教えれ ばそれを介して子どもの友だち関 係が広がるのではという期待がみ られた。

それが 2012 年には、これまでの自 分のやり方に疑問を呈し、一種の 教育方針の転換がみられた。それ は、自分の母語を子どもたちに無 理強いするのではなく子どもの意 思・意欲を最優先するというもの で、中国人としてのアイデンティ ティより母親としての側面を子ど もたちに向けていきたいという意 識の変化であった。母娘共社会に 居場所を見いだせない不安定な時 期であった 2010年当時、中国語の 継承は、母娘間の衝突を生みなが らもAの文化的アイデンティティ の支えでもあり、自分や子どもの 社会への適応手段としての期待で もあった。それが、子どもやA自 身がそれぞれ社会で認められる場 を見つけられつつ状況が変化する のに伴い、他に学びたいことがあ るのなら子どもたちが必ずしも中 国語を覚える必要性はないと、 どもに期待する中国語は一つの芸 や能力として捉えるように変化し ていた。鈴木(2007)は、国際家 族における言語・文化継承のメカ

ニズムについて、家庭の言語や文

化は、親、特に異文化出身の親の 言語や文化、教育についての考え 方が密接に関わるとし、 時間の経 過とともに変化する子どもの個性 や反応・状態によって修正されて いくという。 A の本心には子ども たちに中国語習得の願いが依然存 在すると思われるが、「私は家にい る時、自分が中国人ではないです ね」という語りに象徴されるよう 社会の中で自己の文化的アイ デンティティを肯定的に受け止め るようになったことで、家庭の中 で子どもと衝突してまで母語を継 承する必要性がなくても精神的な バランスが保たれているためと思 われる。 武田(2010)は、外国人居住者の 少ない地方や農村ではほとんどの 国際結婚者の子どもがモノカルチ ャーな「日本人」として育ってい る現実について、外国人妻があえ て母語や母文化を主張せず、周囲 との不要な摩擦を回避して日本社 会の中で戦略的な適応過程を生き ていると指摘し、こうした状況を 日本文化への一方的な同化」と 従来の研究者から批判的に捉えら れてきたことに疑問を呈している。 賽(2011)もまた、中国出身の国 際結婚女性について、従来の受動 的な捉え方を見直し、言語習得を 含め、主体的に教育戦略を立て、 子どもを通した自己の将来像を見 据えていると示唆している。Aに おいて、子どもたちが日本社会に 違和感なく溶け込み、周囲と良好 な人間関係を築き、順当な発達段 階を経て成長してほしいという願 いが最優先され、それらに影響を 及ぼしてまで、母親である自分の 母語や母国の習慣ややり方を子ど もに継承させようという教育方針 はとっていない。A自身の環境や Aと子どもたちとの関係の変化に 伴い、母語や継承語に対する考え 方や態度が変わるのかどうかにつ いては今後の課題であるが、日本 と母国という二つの文化に生きる アジア人妻やその子どもたちが、 つの文化に自己のアイデンティ ティの拠り所を求めるというより も、自らが置かれている環境やラ イフステージから多分の影響を受 けつつ、その時々において両者を 自己の中で折り合いをつける姿勢 が示唆された。 このように、今回中国人女性Aの 事例から、文化的アイデンティテ

ィは同じ人物にあっても決して単

- で 普 遍 的 な も の で は な く 、 ア イ デンティティが意識化される時や 状況、心境などは、その時々の人 間関係や周囲の自己や文化の受容 度などによって変化する変質的で ハイブリッドなものであることが 分かる。しかも、文化的アイデン ティティが意識の上で顕在化す のは、周囲との不均衡な人間関係 において自己の能力や心情、意見 が周囲に受容されていないという 認識に基づく場合が多く、そうし た状況を自分自身に理解・納得さ せる手段として、文化的アイデン ティティはしばしば引き合いに出 されることがある。逆に、社会に おいて自己が受容されている場合 、文化的アイデンティティは意 識化されないか、されたとしても 自己を肯定する自信につながるも のである。さらに、社会における 母語の活用は、それ自体が直接的 に文化的アイデンティティの矜持 を保つというより、ともすれば文 化的同化の波に浚われそうになる のを防ぎ、周囲と異なる自己をあ りのまま容認し合える関係作りの 下支えとして寄与していると考え られる。

5 . 主な発表論文等 (研究代表者、研究分担者及び連 携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 0 件)

[その他]

山梨大学研究者総覧

URL: http://nerdb-re.yamanashi.ac.jp/Profiles/340/0033931/profile.html

6 . 研究組織 (1)研究代表者 伊藤 孝恵(ITO,Takae) 山梨大学・総合研究部・准教授

研究者番号: 10348104